

斜めを許容する建築

人は窓を通して水族館にいる生き物をゼロ距離で観察することが出来る。水族館は本来自触れ合う機会がない海洋生物と僕らとの間を近づけてくれる場所だと感じた。東京湾と葛西臨海公園、葛西臨海公園と護岸、水族館と人間こうした物と事の距離を操作する事が今回の建築の目的である。

東京湾には汚染や、埋め立てなどにより多くの魚が死に絶えていった過去がある。しかし現在は年々汚染が浄化・再生され魚たちが住める環境になってきている。人間にとっても東京湾に親しみを感じられるような、水族館とアクティビティを融合させたプログラムを提案する。



外観パース

<形の根拠>

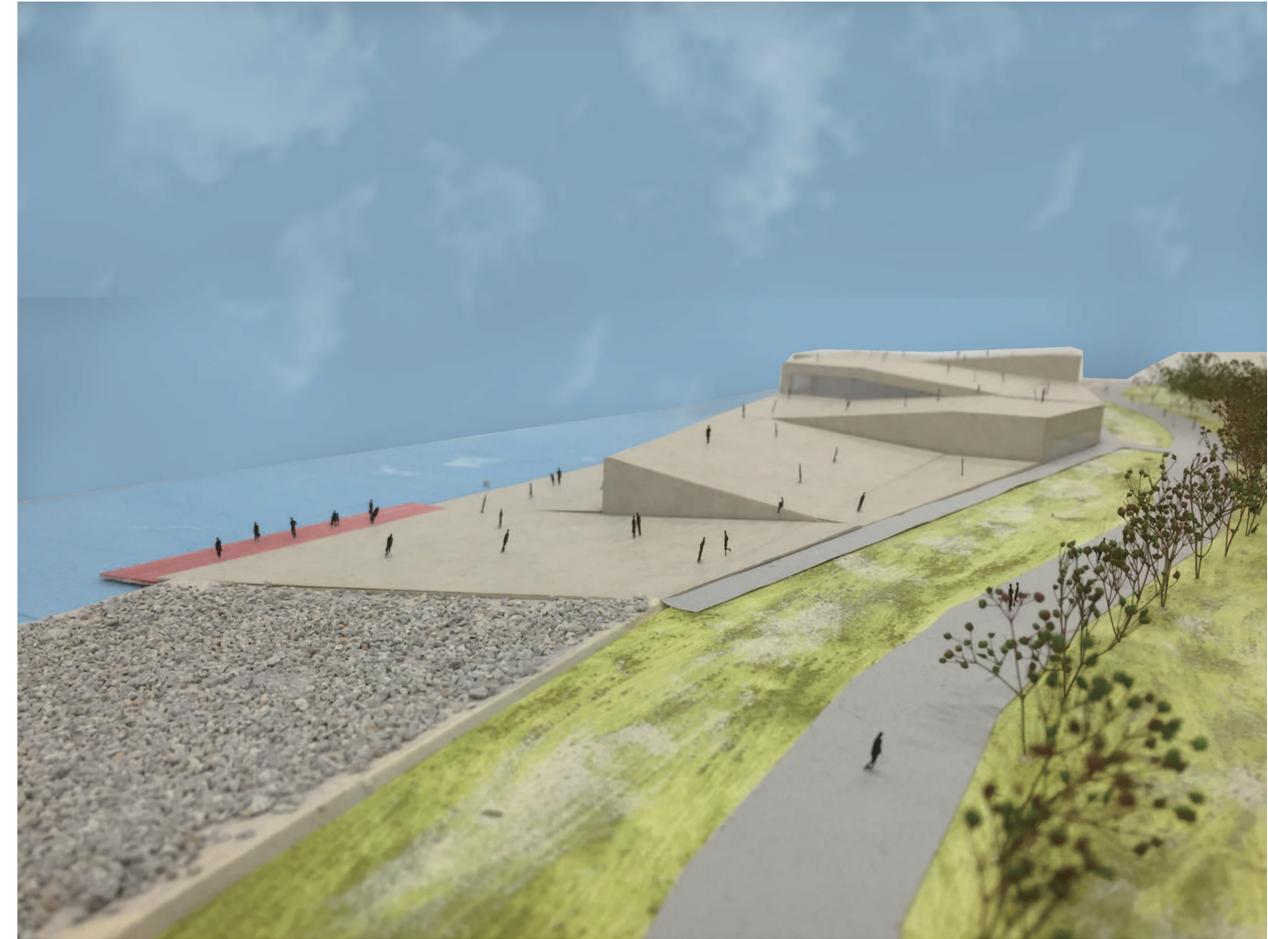
葛西臨海公園は護岸によって形作られていることが分かる。敷地見学をした際に護岸が公園と東京湾の距離を作っていると感じた。この護岸の一部に建築を埋め込む事で、公園から東京湾に対してより近づいた建築を提案する。

<背景>

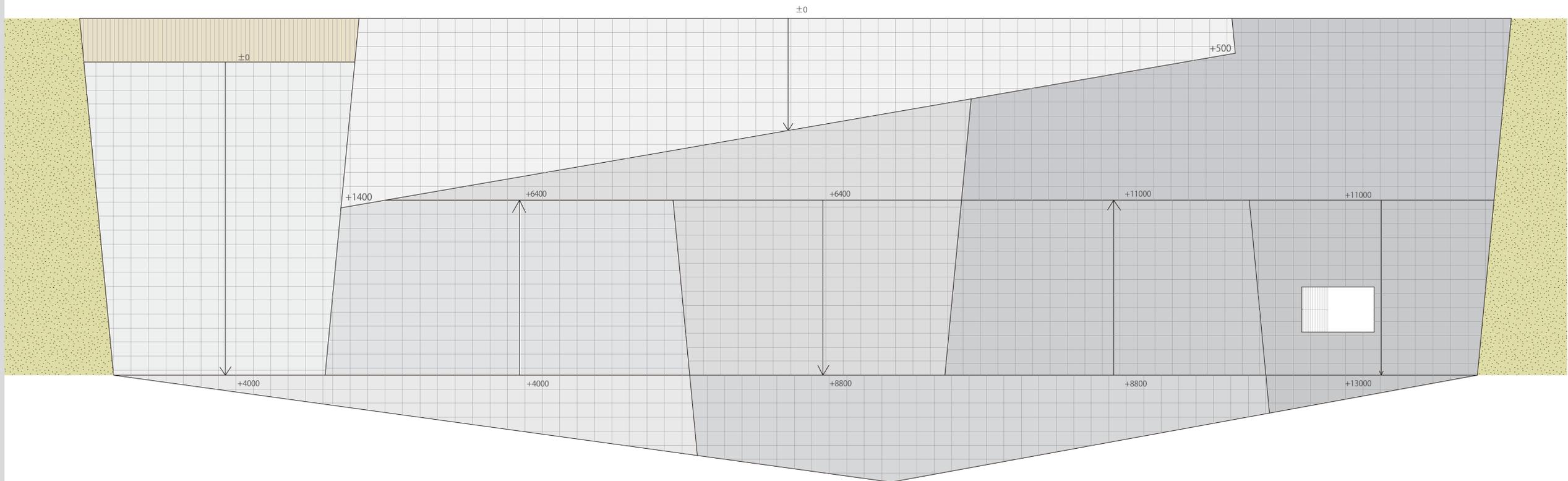
今回の敷地はその東京湾に面している葛西臨海公園にある。ここには谷口吉男氏が設計した葛西臨海公園が位置している。この水族園が近年、老朽化を迎え、建て替えが決まっている。ここではその改築案としての水族館の提案である。

<水族館 × アクティビティ>

バー、カフェ、レストラン、釣り、図書館、そして外部の屋根。これらと水族館を一体とすることで、身近に生き物を感じられるよう設計した。今までの水族館はレストランやミュージアムショップは生き物を見た後に楽しむものであった。しかし人間が活動する場所を水族館内に包括してしまうことで、そこは展示としての空間だけでなく留まる空間となっていく。



屋根伏せ図





東なぎさを望む



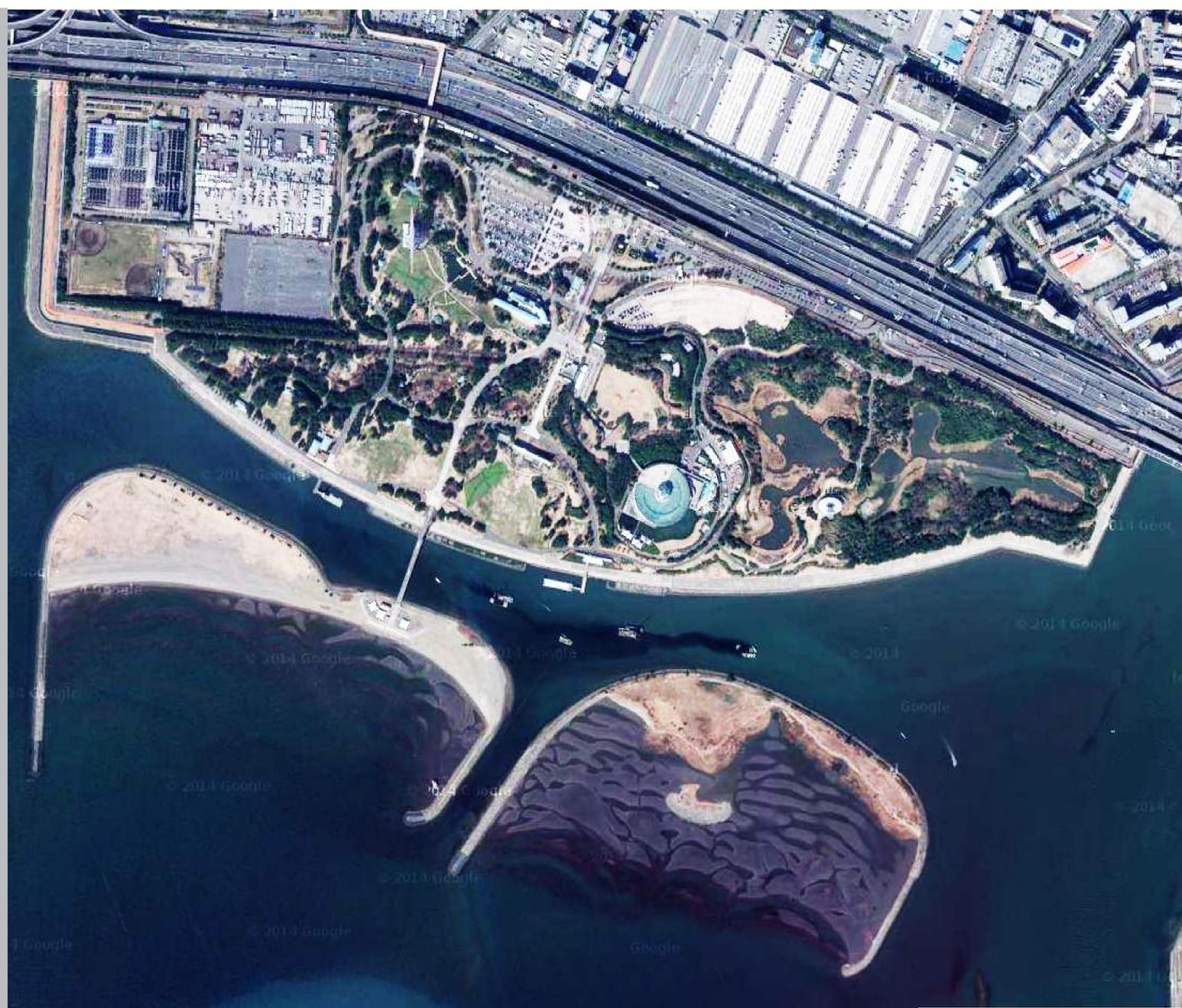
敷地西側



敷地西側から望む



敷地となるフェリー乗り場



東京湾は高度経済成長による、工場排水からの水質汚染や、大規模埋立による干潟の消滅、湾中酸素の減少により漁獲量が減少といった影響を受けてきた。そして今から半世紀も前に遊泳禁止となった。しかし、今現在水質改善のため試験的に遊泳解禁がされている。また、この葛西臨海公園内には谷口吉男さんが設計した葛西臨海水族園があります。この水族園が老朽化に伴い、2025年開園に向け改築されます。

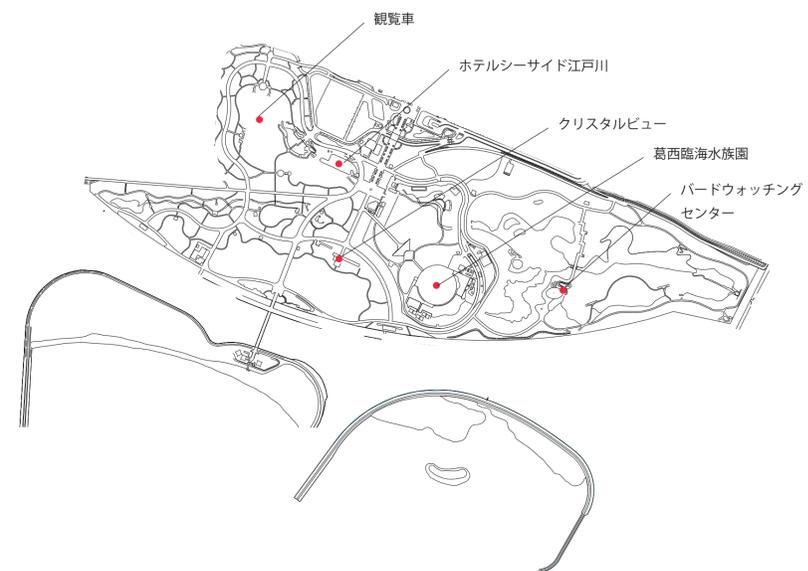


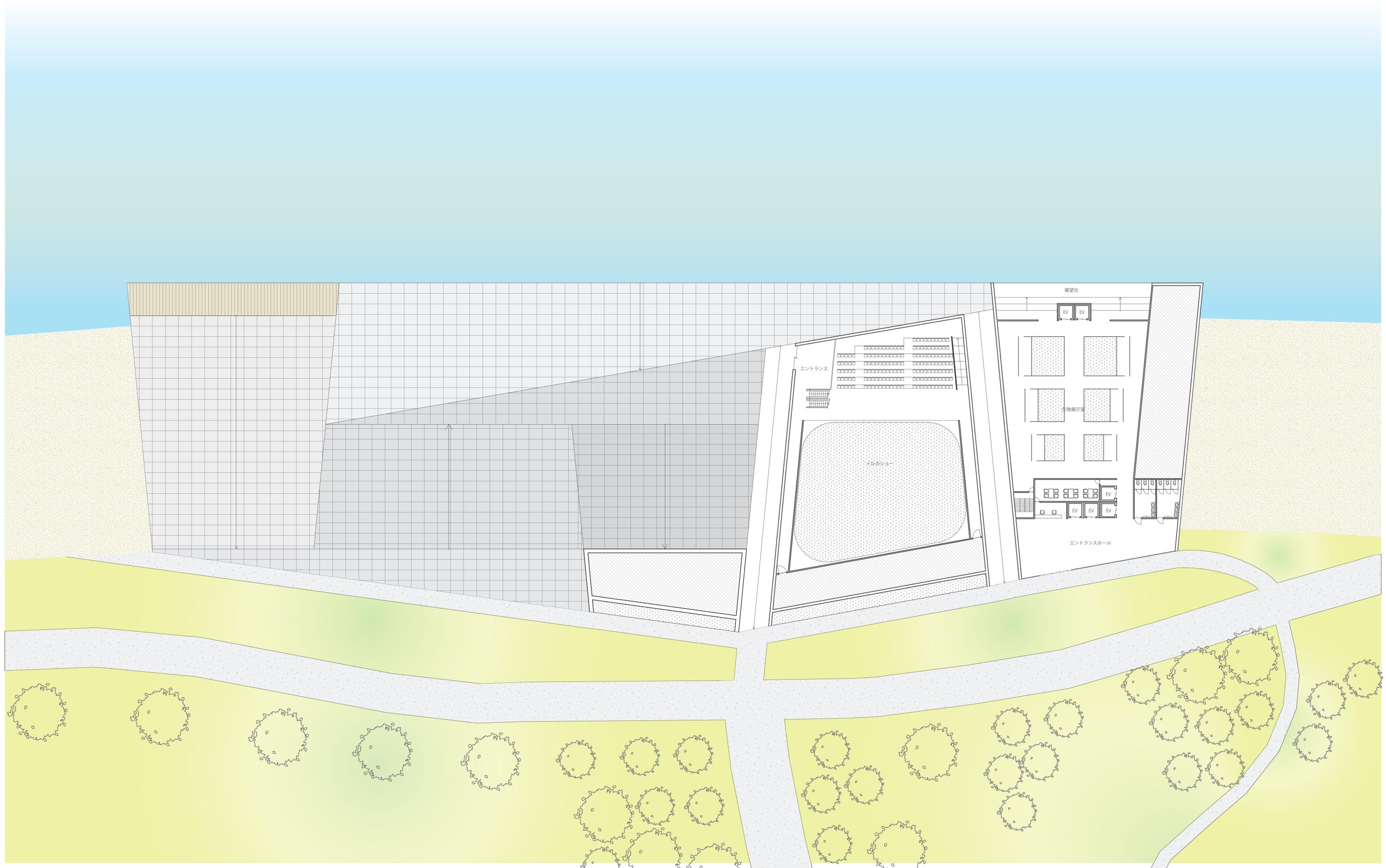
葛西臨海公園は護岸に囲まれた公園です。左手の渚は自然環境保護のために立ち入ることが禁止されている。

アクセス

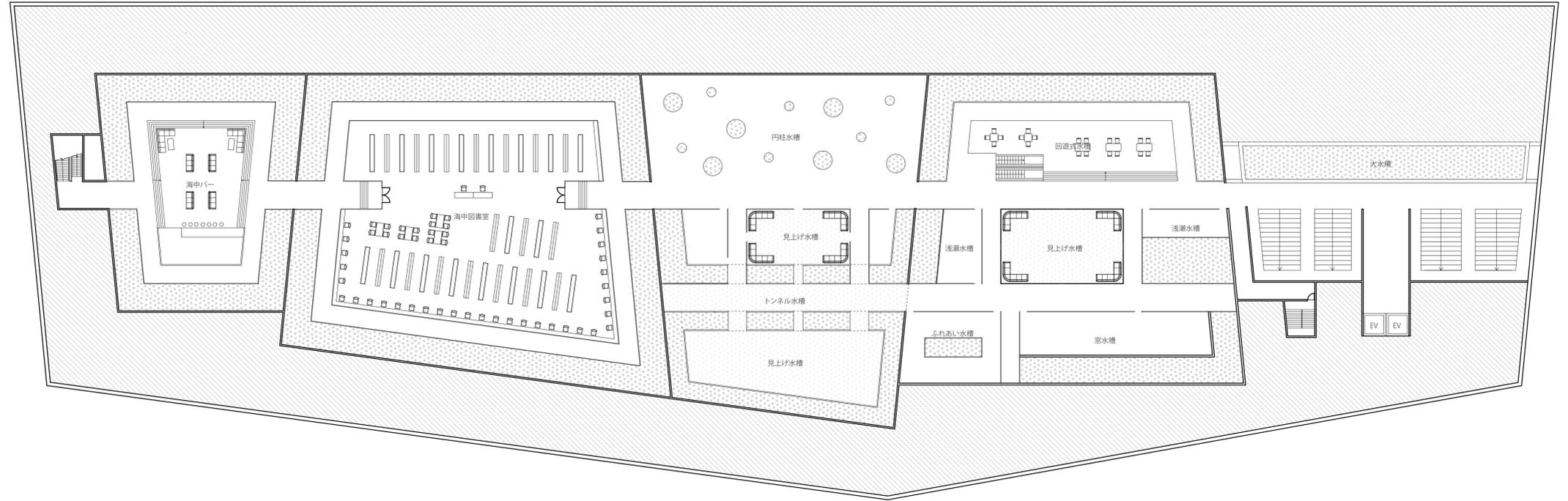


周辺施設





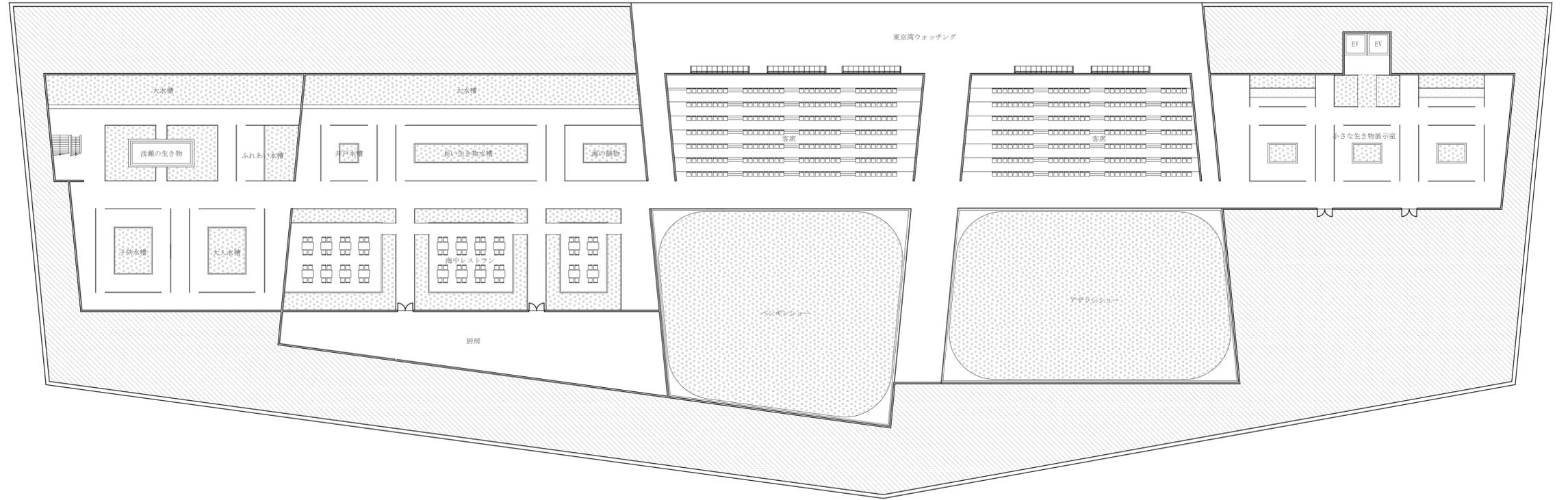
B2F 平面図



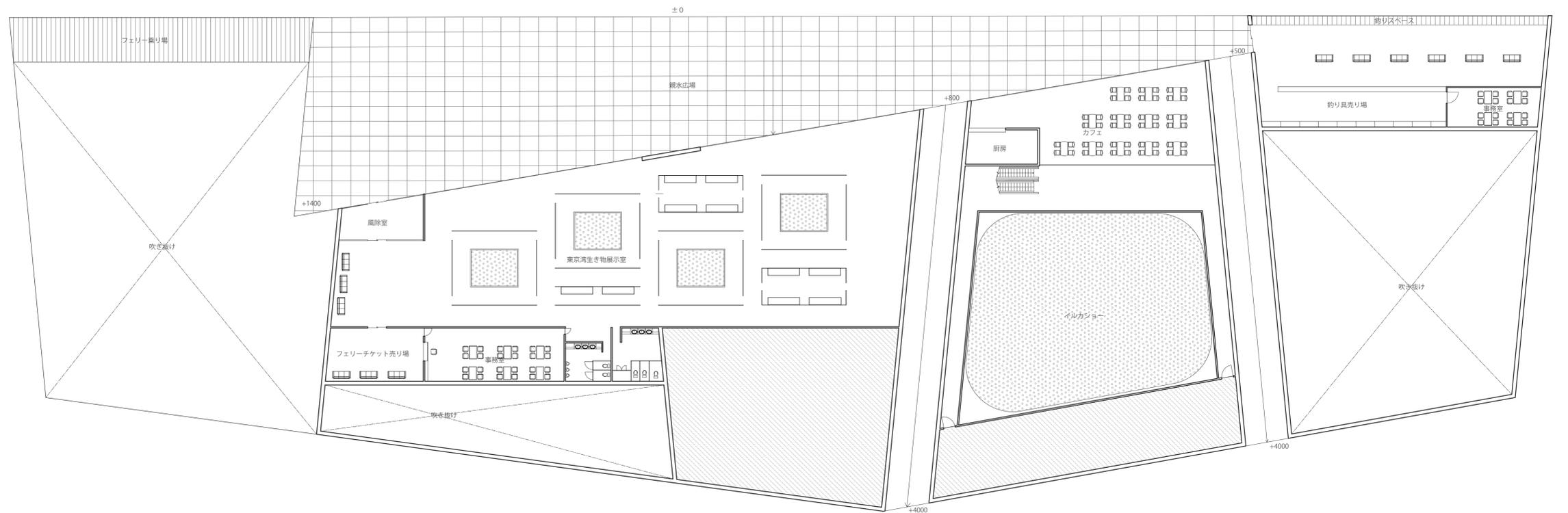
海中バーパース



B3F 平面図



B1F 平面図



海中図書館エントランス



学習スペース

